太宰府の文化財 351

水城跡の木樋

特別史跡水城跡は今年で築造１３５０年を迎えます。古代に人工的に造られた巨大な防衛施設はその成立について『日本書紀』天智３（６６４）年の記事には「大堤を築き水を貯へしむ。名けて水城と曰ふ」と記され、水をたたえる機能があったこと、人工的な盛り土による大きな堤であったことが知られます。中世になってもそのことは情報として残されていたようで、連歌師の飯尾宗祇が記した『筑紫道記』の文明12（１４８０）年の記事には、水城について「よこたはれる山のことし、尋れは是も天智天皇のつかせ給ひけるとなん」とあり、８００年の時の時間が経過しながらも、地元では天智天皇の時代につくられたことがきちんと伝わっていました。

観世音寺天智院

江戸時代になると水城の構造に関する具体的な文字の記録が見られます。宝永６（１７０９）年の完成とされる貝原益軒による『筑前国続風土記』には「元禄十二年此堤の辺の田をほりしに、大なる木二本有て掘出しける。（中略）此土堤を築し時の台木なるへし。」とあり、青柳種信が編纂し、天保８（１８３７）年頃に完成したとされる『筑前国続風土記拾遺』には「近年も桧杉樫等の大材を此川の辺より穿出せり。少も朽損なし。」とし、水城から巨木が掘り出されたことを記しています。文政４（１８２１）年にできたとされる奥村玉蘭による『筑前国名所図会』には「中に崩て川の流たる所一丁あり、此所より往々大木の板のたくひ掘り出したる事あり、是は樋に用ひたる物なるへし」と記され、川（御笠川か）のほとりで掘り出された板状の巨木は、水城の樋（地下に埋めた導水施設）であったと推定していたようです。その想像は昭和45（１９０７）年に始まった福岡県による発掘調査によって樋であることが追認されることになりました。

水城から巨木が出たことは地元の人を驚かせました。巨木は新しくは昭和22年頃にも水城近くの水田で発見されたとされ、その木でつくられた「宮村講堂」と彫られた看板が学業院中学校に残されています。また、国分の国分密寺でも本堂に掲げられた寺名を彫った額は水城出土の木材とされ、観世音寺には掘り出された板材そのものが長く保管されていました（現在、九州国立博物館で展示）。また、観世音寺の境内にある天智院という建物にも水城から出土した木でつくられた材木が使用されているということです。太宰府の人々は水城が天智天皇の時代につくられた歴史的な遺産であることを何世代にもわたって言い伝え、そこから出土した巨木（樋の部材）のことも長く伝えようと、さまざまな工夫をこらして来たようです。

国分密寺本堂の額

水城東門の木樋（写真提供　九州歴史資料館）

文化財課　山村信榮

編集／太宰府市総務部経営企画課：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121　FAX(921)1601　keiei-kikaku@city.dazaifu.lg.jp
この広報誌は再生紙を利用しています。

太宰府の文化財 352

水城と御笠川

水城一丁目・国分一丁目　古代

特別史跡水城跡は今年、築造1350年を迎えました。全長約1.2km、高さ9mもの土塁と、その前にもうけられた幅約60mの外濠によって、福岡平野からの進入を防ぐため築かれた水城ですが、のちに大宰府の出入口として数々の物語に登場し、また歌枕（和歌に詠まれた名所旧跡）としても知られています。

御笠川東岸の巨石群（九州歴史資料館写真提供）

水城の名前は、『日本書紀』天智天皇3（664）年是歳条に、「筑紫に大堤を築きて水を貯えしむ。名づけて水城という」と記されているように、水を貯えたことに由来します。巨大な導水管（木樋）を土塁の下に据えて内濠から外濠へ水を流していたことも確認されており、水城と水との関係は明らかです。ところが、中央を流れる御笠川との関係については、いまだ明らかではありません。

大きな石が写った写真があります。九州自動車道の橋脚をつくるとき、水城の土塁（上成土塁）の延長と御笠川とが交差する付近で見つかったものです。巨石が乱雑に積まれているだけのように見えるので、上流側に水を貯めるために川の中に石を積み、あふれた水を下流に流した「洗堰」と想定されました。防御のことを考えると、ここが塞がれていないと意味がありませんので、その可能性もあるでしょう。

ただ、その調査報告の中には、巨石とともに奈良時代以来の瓦が多く見つかったことや、以前は塼（レンガ）が敷きならんでいた、という地元の古老の話が掲載されています。また、このすぐ近くの御笠川の中から、大宰府政庁などで使われている奈良時代の鬼瓦が発見されています。水城で使われた鬼瓦とみられますが、もし洗堰だとすると鬼瓦を設ける場所がありません。

この近くには「古門畑」という小字があります。これをもとに考えると、御笠川に設けられた水門の屋根を飾った鬼瓦ということも考えられます。そうすると写真の巨石は水門の石垣の一部だったのかもしれません。

平安時代後期の歌人・源俊頼（1055～1129年）は水城の和歌を詠み、「筑紫にて舟寄せはべりてのち上りけるに、水城というところを出」たと記しています。鎌倉時代中期の歌人・藤原光俊（1203～1276年）は、夕霧が立ちへだてるため「岩垣の水城の関に舟もかよわず」と詠んでいます。これらは水城に舟が通っていることを前提とした和歌です。つまり御笠川は、ふだんはせき止められていなかったと考えられます。

ここに「水城の関」と詠まれているように、水城は大宰府に入るための交通の関門でした。御笠川にも「岩垣」の水門が設けられ、平時には舟が通っていたことが想像されます。

文化財課　井上信正

御笠川で見つかった鬼瓦（太宰府市指定文化財）

編集／太宰府市総務部経営企画課：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121　FAX(921)1601　✉keiei-kikaku@city.dazaifu.lg.jp
この広報誌は再生紙を利用しています。

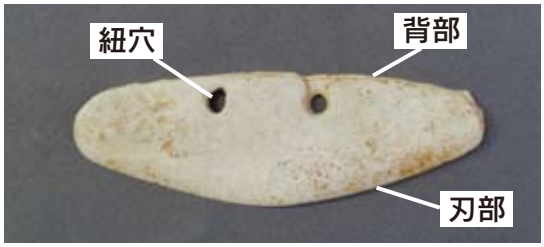
太宰府の文化財 353

前田遺跡出土の石包丁　弥生時代

前田遺跡第7次調査　向佐野2丁目

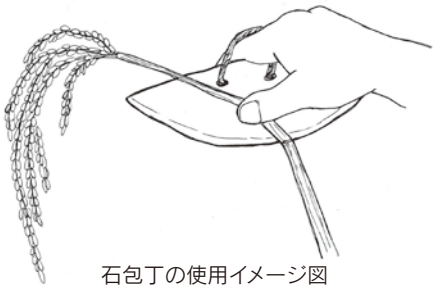
秋に入り過ごしやすくなりました。市内の田んぼに目を向けると、稲穂が風に揺れています。今年も稲刈りの季節になりました。そこで今回は稲刈りに関連して、昔の稲刈りの道具を紹介します。

石包丁は、弥生時代に使われていた稲刈りの道具です。名前については、稲の穂を刈り取る部分が刃になっていることから、包丁のような機能をもった石の刃物と考えられたことが由来です。最近では、稲刈りの道具であることを明確にするために、「石製穂摘具」という言葉も使われています。



前田遺跡出土石包丁

この石包丁は本市でも見つかっています。写真は平成2（1990）年に発掘調査が行われた前田遺跡から出土したものです。前田遺跡は市の南西部、佐野地区の土地区画整備事業に伴って調査された弥生時代の集落遺跡です。遺跡からは竪穴住居や掘立柱建物、柵列が確認されています。


石包丁の使用イメージ図

石包丁は、材料となる石の塊から板状に形を整えていきます。手で握る背の部分と刈り取るための刃部に整形した後に、石錐という現在のキリのような石の道具を用いて穴をあけます。最後に研磨して稲穂が刈り取れるように磨いて刃を作り出します。出土した石包丁は泥岩製で、大きさは縦3.5㎝、横10.6㎝、厚さ0.6㎝を測り、手の中におさまる大きさです。中央上端寄りに直径5㎜の紐通しの穴が2カ所みられます。半円状に弧を描く部分は刃にあたり、刈りやすくするために刃は両側から研ぎ出されています。使い方は石包丁の紐穴に紐を通して作った輪の中に指を入れて握り、稲の穂だけを指でひっかけてちぎるように刈り取っていました。

前田遺跡周辺の様子（平成2年）

さて、弥生時代の稲刈りですが現在の「根刈り」とは異なり、「穂首刈り」が行われていました。稲についての知識が十分でなかった当時は、種もみを直に田に播いたままで収穫していました。その際、米の育成に差が出て一斉に実ることはなかったようで、実った稲穂を順次摘み取る必要があったようです。前田遺跡（第1次調査）では弥生時代後期の住居跡から炭化米が出土しており、分析した結果、稲の粒の形が一定でないことがわかりました。弥生時代以降、田づくりの技術の向上とともに、種もみの選別がおこなわれたことや、栽培も直播きから株ごとに植える田植えに変わったことから、稲の生産性が向上し、一斉に穂が実ることが可能になったと考えられます。その結果、効率の良い鎌を使った「根刈り」へと移っていき、石包丁は使われなくなりました。

稲作の歴史は2000年以上の昔にさかのぼり、北九州地方は全国でもいち早く稲作を取り入れた地域でした。前田遺跡からは、弥生時代前期の住居跡から石包丁が出土していることから、早くに稲作がおこなわれていたことがわかります。遺跡からは水田は確認されていませんが、集落からそう遠く離れていない場所に耕作地があったと推測されます。この石包丁は、弥生時代に佐野地区で稲作がおこなわれていたことを伝える重要な遺物です。

文化財課　中村茂央

編集／太宰府市総務部経営企画課：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121　FAX(921)1601　keiei-kikaku@city.dazaifu.lg.jp
この広報誌は再生紙を利用しています。

太宰府の文化財 354

朝日山出土の層塔

――大宰府条坊跡第210次調査――

中世　観世音寺5丁目

四王寺山の南裾には、朝日地蔵が祀られている朝日山と呼ばれている小山があります。この山を削って宅地造成することに伴い、平成12年度に発掘調査を行いました。その結果、過去この「太宰府の文化財」でも紹介をした、緡銭（NO.326）、草文双鳥鏡（NO.340）、瓦経（NO.346）をはじめとする中世期の貴重な文化財が沢山見つかりました。

今回紹介するのは、その朝日山の北側の調査をおこなった際に見つかった層塔です。層塔とは塔身と笠の組み合わせで構成される石塔のことをいいます。一般的な層塔の塔身の四面には、仏像や種字（仏を表す梵字）が彫られています。見つかったのは塔身の一部でした。石材の材質は泥岩です。寸法は高さ17・5㎝、横幅23・1㎝、奥行き23・2㎝（すべて残存値）の方形です。上と下を除く側面の4面にはそれぞれ四角形の彫り窪みがあり、そのなかに神仏と思われる像が彫られています。

参考画像：薩摩国分寺層塔

像の様子がわかるものの詳細を見ていきますと、A面の像は坐像で、袍（公家装束の礼服）のようなものを着て、手は右手を外に組んでいるように見えます。頭をみると冠をつけた表現がみられます。これらの特徴からこの像は神像と考えられます。

B面の像は表面が削れているため、なかなか解釈が難しいものです。よく見ていくと、像は手を合わせておらず、右手と左手の位置がずれています。この状態を、胸の前で左手の人差し指を立てて拳を作り、その人差し指を右手の拳で包み込む智拳印と考えると、金剛界大日如来と推定できます。また、別の見方をすると、左手と右手が智拳印にしては離れすぎており、本来は左手に何かを持って、右手は削れてしまった状態とも見えます。そうすると、右手が施無畏印で左手に蓮華をもつ観世音菩薩という推定もできます。残りが悪い他の面は、像のシルエットから推定して、如来像の可能性があります。

一般的な層塔の4面には、四方仏が彫られていることが多いのですが、この層塔は神像、仏像（大日如来か、観世音菩薩）、如来像と、像のモチーフが統一されていません。この様な層塔は大変珍しいものです。類例としては、鹿児島県薩摩川内市指定文化財の薩摩国分寺層塔が、4面それぞれの尊格（仏様の種類）が統一されていない例として知られています。

この朝日山出土の層塔は、太宰府の中世宗教世界を解明していく資料のひとつとして大変貴重なものです。

文化財課　髙橋　学

編集／太宰府市総務部経営企画課：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121　FAX(921)1601　keiei-kikaku@city.dazaifu.lg.jp
この広報誌は再生紙を利用しています。

太宰府の文化財 355

苅萱の関跡

―太宰府市民遺産第9号「苅萱の関跡とかるかや物語」―

坂本一丁目の関屋交差点付近一帯の旧小字名「関屋」は、かつてこの付近に「苅萱の関」という関所があった事に由来するといわれています。

苅萱の関の成立時期は明らかではありませんが、※史料で確認できるものとして、筥崎宮が所蔵する永享10（1438）年の文書（「油座文書写」）に、苅萱の関で「過銭」（通行税）を取っていたことを示すものがあります。また、室町・戦国時代の連歌師・飯尾宗祇は、文明12（1480）年に苅萱の関を通ったときのようすを、紀行文「筑紫道記」で「かるかやの関にかかる程に、関守立出て、我行くすゑをあやしげに見るもおそろし」と記し、次の歌を詠んでいます。

数ならぬ　身をいかにとも
事とはは　いかなる名をか
かるかやの関

（ものの数にも入らないようなこの私の身を、苅萱の関を通るにあたって関守が何者だと問うたならば、どのような名を借りて答えたらよいだろうか）

「かるかやの関」は古くから歌枕としても知られ、さまざまな和歌集や歌合せで見られます。そして、天文7（1538）年には、遣明船に乗る僧が風待ち中に旧跡見物として苅萱の関を訪れた記録（「策彦和尚入明記 初渡集」）があるほか、天正15（1587）年の豊臣秀吉の九州平定に随行した細川藤孝（幽斎）の紀行文「九州道の記」では、「かるかやの関の跡」と記述され、この頃には関所はなくなっていた事がわかります。

その後「苅萱の関跡」は、太宰府の名所のひとつとして知られ、江戸時代の絵図や、明治～昭和ごろの観光案内や絵葉書などでも紹介されていました。それには、この苅萱の関を舞台とした、苅萱道心と石堂丸親子の悲しい伝説が関係しています。伝説の詳しい内容については紙面の都合上割愛しますが、苅萱道心は苅萱の関守だったという設定です。関所があった場所は分かっていませんが、かつて、石堂丸の姉・千代鶴の墓と伝えられる塚があり、そこが苅萱の関跡とされて看板が建てられていました。現在は少し場所を替え、旧日田道沿いに石碑が建っています。

この地元の文化遺産を後世に伝えていこうと、坂本区・通古賀区の住民を中心に育成団体「かるかや物語を伝える会」が結成され、平成26年3月22日、太宰府市景観・市民遺産会議で「苅萱の関跡とかるかや物語」として市民遺産に提案し、市民遺産第9号に認定されました。会では、苅萱の関跡の石碑周辺の美化活動や勉強会などを通して、守り伝えていこうとしています。

※古くは、菅原道真の和歌に「かるかやの関守にのみ見えつるは人も許さぬ道辺なりけり」とあり、古代から関所があったとする説もあります。

文化財課　遠藤 茜

かつて建てられていた看板

現在の苅萱の関跡石碑

かるかや物語を伝える会の皆さんで、薄くなった説明書きに墨入れ作業（平成26年5月～8月）

■お知らせ■

太宰府市民遺産を認定する次の会議は、九州国立博物館ミュージアムホールにて平成27年2月21日㈯を予定しています。

編集／太宰府市総務部経営企画課：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121　FAX(921)1601　keiei-kikaku@city.dazaifu.lg.jp
この広報誌は再生紙を利用しています。

太宰府の文化財 356

石臼
―市内に見られる石臼―

新年を迎え、年越し蕎麦やきな粉餅などを食べられた方は多いのではないでしょうか。私たちの暮らす日本には、「うどん」や「そば」など多くの粉食文化が見られます。麺類の他にも多くの粉を使った食べ物が各地にあり、私たちの食生活にとって小麦粉などは欠かすことのできない食材の一つになっています。日本における「うどん」や「そば」は、仁治二年（１２４１）に大宰少弐武藤資頼により博多に建立された承天寺の「饂飩蕎麦発祥之地」の石碑に見られるように円爾（聖一国師）によって製法が伝えられたといわれています。そして、これらの粉を挽くための道具として、少し前までは石臼が使われていました。そこで、今回は太宰府市内に見られる石臼を少し紹介したいと思います。

観世音寺の碾磑

観世音寺の碾磑（上臼）

観世音寺の碾磑（下臼）

石臼とは、上下に円盤状の石を重ねた、粉を挽くための道具です。穀物や茶などの食物の他に鉱物などを粉にするために用いられ、少し前までは納屋や庭先などでよく目にするものでしたが、最近は目にする機会が減ってきたように思えます。

石臼の歴史は古く、「日本書紀」の推古天皇18年（６１０年）に高麗から来日した僧曇徴が絵具や紙、墨を作った他に水力を利用した碾磑（てんがい・みずうす）を造ったと書かれ、この頃に日本へ伝えられと考えられています。

この碾磑は、石臼を中国語で表記したもので、観世音寺の境内に残る大型の石臼も碾磑と言われています。石臼は直径約１０３cmと大型のもので、江戸時代に書かれた「筑前國續風土記附録」には里人に「鬼の茶臼」と呼ばれる石臼があることが記録され、人々に親しまれていたようです。しかし、この石臼で何が挽かれたのかは今も分らず、観世音寺創建時に建物を塗った顔料を挽いたとも考えられています。

石臼は、中世になると寺院や貴族の中で使われ始め、武士の間に広がった茶の湯により茶臼が重宝されるようになり、全国に広がったと考えられています。そして石臼の普及とともに全国に粉食文化が広がりますが、太宰府では少し違っていたようです。

太宰府市内からは数多くの石臼が出土し、さらに市内を中心に広がる大宰府条坊跡では平安時代後期（11世紀後半から12世紀）に粉などを捏ねたり練ったりするために使用されたと考えられる「こね鉢」が出土しています。これらの出土遺物は、全国に先駆けて粉食が行われていたことを示す資料であり、大陸との窓口として逸早く大陸文化と接してきた太宰府の食文化を物語る一つといえます。

市内を散策する際には、集落内の台所や寺社の厨などで石臼が使われていた光景を思い浮かべ、散策してみてください。そして、古くから続く日本の粉食文化を楽しんでみてはいかがでしょうか。

文化財課　沖田正大

編集／太宰府市総務部経営企画課：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121　FAX(921)1601　keiei-kikaku@city.dazaifu.lg.jp
この広報誌は再生紙を利用しています。

太宰府の文化財 357

消えた銅の鳥居と残された礎石

いつも多くの人々で賑わう太宰府天満宮参道。西鉄太宰府駅前の太宰府交番の南側には、72年前まで青銅製の大鳥居(銅の鳥居)がありました。

この鳥居は天明元(1781)年12月に常安九右衛門保道が寄進したものです。大きさは高さ2丈2尺7寸(約6.9m)、左右竿間(柱の間)1丈5尺3寸(約4.6m)、竿石周り8尺2寸(約2.5m)あり、現在西鉄太宰府駅から参道を行くと最初に建っている元禄9(1696)年建立の石造鳥居とほぼ同じ大きさだったことがわかります。

銅の鳥居の絵葉書(明治時代)

鳥居を寄進した常安九右衛門保道(1740~1801年)は、捕鯨で財をなした唐津の豪商で日野屋九右衛門として名声を得ていました。九右衛門は、鋳工の棟梁に摂津国(大阪)の眼流平兵衛塚重を迎え、天明元(1781)年12月唐津の木綿町で鋳造を開始し、天明3(1783)年3月に全ての部材が完成しました。5月に鳥居の部材は船で運ばれ、博多湾で陸揚げされます。その後陸路で太宰府に運ばれますが、その道中は多くの見物人で賑わいました。

鳥居の部材は唐津で造られましたが、鳥居の礎石だけは太宰府で造られています。宰府の町外れから切り出された石材は、天明3年5~7月にかけて、太宰府の吉郎次、博多の仁右衛門など12名の石工によって礎石に加工されました。そして、天明3年8月3日から鳥居の組み立てが始まり、12日に完成、16日に落成式が行われました。

国旗掲揚台の台石になった礎石

蛭児尊の台石となった礎石

銅の鳥居は、太宰府の人をはじめ、天満宮を参詣した人々を驚かせました。江戸時代の俚謡(地元のうた)で「大町の大町の銅の鳥居が太いとて、見る人ごとにオーサびっくりしゃっくり、びっくりしゃっくり」と謡われるほどでした。

長年親しまれた銅の鳥居でしたが、昭和18(1943)年8月12日、太平洋戦争での金属資源不足を補う金属類回収令により、解体され供出されてしまいました。消えた銅の鳥居の堂々たる姿は、明治から昭和にかけての絵葉書に見ることができ、北側の柱の表に「天明元年辛巳冬十二月朔旦　肥前國唐津願主　常安九右衛門保道」、南側の柱の表に「奉造立神門一基」と刻まれた文字も見ることができます。

このように消えてしまった鳥居ですが、太宰府で造られた2つの礎石は現在も場所を変えて残されています。ひとつは参道突き当たりにある延寿王院前の国旗掲揚台の台石になっています。その礎石の台座は直径約140cm、高さ19cmの円形で、梅ヶ枝餅のような形をしていて、中央にはさらに直径76cm、高さ60cmほどの円柱が造り出されています。この円柱は鳥居をはめ込むためのものです。もうひとつは、昭和27(1952)年太宰府天満宮にあった蛭児尊と共に福岡市博多区麦野四丁目に移され、その蛭児尊の台石として使われています。

離れ離れになった礎石ではありますが、それぞれで第二の役目を果たしています。

文化財課　宮崎　亮一

編集／太宰府市総務部経営企画課：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121　FAX(921)1601　keiei-kikaku@city.dazaifu.lg.jp
この広報誌は再生紙を利用しています。

太宰府の文化財 358

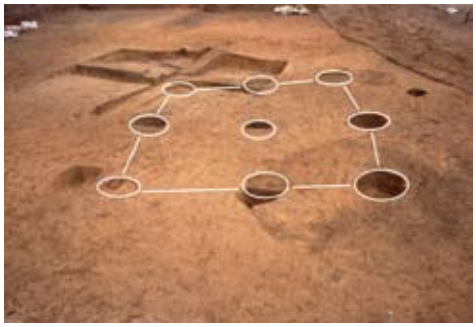
古墳時代の集落遺跡、江牟田遺跡第1次調査 梅ヶ丘一丁目

昨年の4月から9月にかけて、梅ヶ丘一丁目地内において宅地開発に伴う「江牟田遺跡第1次調査」を行いました。今回はこの遺跡から見つかった古墳時代の集落について紹介します。

江牟田遺跡は丘陵の斜面に築かれた古墳時代後期（6世紀後半から7世紀代）の集落遺跡であることがわかりました。この遺跡からは竪穴住居が14棟、掘立柱建物が4棟以上見つかりました。竪穴住居は方形で規模は大きいもので縦約4m、幅6m、小さいもので縦・横約3mのものがみられます。住居の中は屋根を支えた4本の柱穴のほかに、調理を行ったカマドがありました。カマドには甕を据えるために使った支脚や、煙を外に排出するための煙道がついた住居もありました。また、中からは調理に使った甑や甕のほか、糸を紡ぐ道具である紡錘車も出土しています。いずれも斜面に作られた住居は生活しやすいように、地面を平らに削って作られていました。また、いくつかの住居は重なり合って確認されていることから、同じ場所に繰り返し家を建てて生活をしていたようです。

遺跡全景（西から）

古墳時代の竪穴住居跡（6世紀後半）



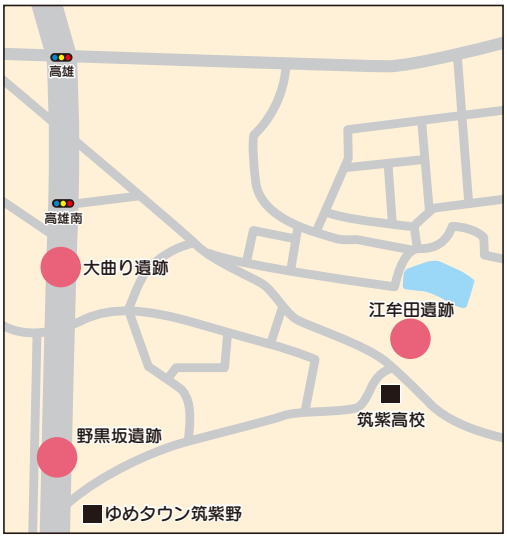
古墳時代の掘立柱建物跡（7世紀代）

掘立柱建物については、すでに上屋は消滅しているためどのような構造の建物であったかはわかりませんが、地面に残る柱穴から規模は縦・横とも約2mを測るものや、縦約1m以上、横約3mの建物が建っていたことがわかりました。また、見つかった掘立柱建物はいずれも竪穴住居の後に建てられたもので、建てられた時期が異なることがわかりました。出土した土器から竪穴住居は6世紀後半を中心に、掘立柱建物は7世紀代に入ってからのもので、集落内で建物の種類に変遷がみられます。

その他、遺跡内からは古墳時代のほか、縄文時代に狩りに使ったと考える落とし穴や、弥生時代の土器や石器片が見つかっています。竪穴住居のような生活の痕跡は確認していませんが、古墳時代より以前は狩猟場として利用されていたようです。

周辺の遺跡をみてみると、同時代または少し古い時代の集落遺跡として筑紫野市の大曲り遺跡や野黒坂遺跡が見つかっています。今回見つかった遺跡が筑紫野市側へ広がりを見せていることを考えると、この一帯は古墳時代の集落が広がっているのかも知れません。

今回の調査でこの地域の歴史の一端が明らかになりましたが、さらにこの地域一帯を解明するためにも今後の調査に期待されます。



文化財課　中村 茂央

編集／太宰府市総務部経営企画課：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121　FAX(921)1601　✉keiei-kikaku@city.dazaifu.lg.jp
この広報誌は再生紙を利用しています。

太宰府の文化財 359

弥生時代研究の黎明と太宰府の遺跡

弥生時代は安定した農耕を中心とした社会構造が出来上がった時代とされ、稲作中心の日本社会の原点の時代とされています。弥生時代の研究は明治17（1884）年に現東京都文京区弥生町の貝塚で理学博士の坪井正五郎らにより、縄文土器とは異なる赤色の壺が発見されてことによってはじまりました。その後、弥生土器は石器を使った「先史時代」のものとされ、金属器を使用した「原史時代」の前の時代に位置付けられていました。それに異論を唱える学者が現れます。東京帝国大学医学部から明治39（1906）年に福岡医科大学（現在の九州大学医学部）に赴任した中山平次郎博士は、少年時代に読んだ弥生町の貝塚調査報告をきっかけに考古学に興味を持ったとされ、大正6（1917）年に『九州北部に於ける先史原史両時代中間期間の遺物に就て』という論文を発表しました。博士はこの福岡の地では弥生土器から青銅器が出土する事実を知り、先史と原史の間に石器と金属器が併用された「中間期間」が存在することを学会に提唱しました。これが現在使用されている「弥生時代」となっています。

中山平次郎博士の肖像
（写真提供 福岡市博物館）

かつての高雄地区の遠景（平成元年）

高雄地区（吉ヶ浦遺跡）の弥生時代のカメ棺墓（昭和57年）

中山博士は自説を補強するために精力的に福岡周辺で調査を進めます。そこで選ばれた場所の一つが太宰府の付近の高雄から二日市周辺にかけての丘陵地帯でした。その成果は『太宰府附近に於ける弥生式系統遺跡調査』として昭和5（1930）年に発表されます。博士はこの論文の冒頭で「銅鉾銅剣が弥生式と時代的関係を有せる以上、弥生式系統遺跡の調査に際しては先づ以て調査区域内に於ける銅剣発掘例の有無を取調べ置く必要あり、太宰府附近出土のものは其の個数に於いても意外に多く、記録上からいふと此の地域が此種遺物の最も古き発見地を為して居る。」とし、二日市峰畑遺跡の甕棺から出土した銅剣や高尾山周辺で出土した銅戈（クリス形銅剣）の多量出土の事例などを検証し、報告しています。博士のこれら一連の研究が元となり、弥生時代が青銅器や一部に鉄器を用いた豊かな文化を形成し、邪馬台国をはじめとした東アジア世界に位置付けられる世界観や歴史観を形成することとなりました。

中山博士は先の論文を発表した昭和5（1930）年には九州考古学会を設立しており、九州考古学の父としてその功績は大きく、研究は弥生時代にとどまることなく大宰府出土の古瓦や古代外交施設であった鴻臚館跡、古代官道など現在の大宰府研究の基礎となる分野などにも及んでいます。

教科書に載る「弥生時代」の存在が証明される過程で、高雄地区を含む太宰府近郊の遺跡が研究の対象になっていたことは、案外知られていない事実です。

平成27年2月21日に九州国立博物館でおこなわれた第5回太宰府市景観・市民遺産会議において、高雄地区の皆さんを中心に結成された「高尾山の自然と歴史を語り継ごう会」によって「高雄の自然と歴史」が市民遺産第11号に認定されました。この地域の遺跡研究が日本の歴史の1ページを構成していることも語り継がれることを願います。

文化財課　山村信榮

編集／太宰府市総務部経営企画課：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121　FAX(921)1601　keiei-kikaku@city.dazaifu.lg.jp
この広報誌は再生紙を利用しています。

太宰府の文化財 360

大野城跡　山上の池　古代

特別史跡・大野城跡は今年、築造1350年を迎えました。大野城は、市の北にそびえる四王寺山の山上に設けられた国内最大級の古代山城です。『日本書紀』天智天皇4（665）年8月の記事には、百済の貴族・憶礼福留と四比福夫を朝廷が筑紫へ派遣して大野城と基肄城（佐賀県基山町）を築かせたとあり、日本（当時は倭国）と亡命してきた旧百済国の人々とで築いた城として知られています。その後、奈良・平安時代と200年以上にわたって大宰府の北の守りとなりました。山のいただきをめぐるよう全長約8㎞、高さ6～8mもの土塁や石塁が築かれ、中に入るための門がこれまで9カ所みつかっています。城内の丘の上は造成され、倉庫跡とみられる礎石群が点在しています。

こうした中、川もない山の上に水を貯めた池や井戸があります。大野城の南西側、水城・国分方面からの出入口となった水城口城門のそばには、「けいさしの井」とよばれる石組みの井戸があり、平安時代の土器などが出土しています。また大野城の南側、観世音寺や太宰府駅方面からの出入口となった観世音寺口城門や太宰府口城門のそばには、増長天礎石群の脇に「鏡池」があり、いつも水をたたえています。

これらには共通点があります。一つ目はその形と大きさです。鏡池は直径約15m、深さ2mほどの窪地を利用しています。けいさしの井も、じつは同様の大きな窪地の中に井戸を設けたもので、もともと鏡池のような池だったと考えられます。二つ目は山の頂や稜線沿いの平野を見下ろす場所の近くにあることです。このような窪地は大野城東方の土塁沿いにもあり、拠点となる場所に備わっていたのかもしれません。またこれらは天水を利用した池とみられますが、鏡池が不思議と枯れないことをみると、何か工夫もありそうです。

こうした池跡は基肄城にもあります。東峰の頂上には「つつみ池」と呼ばれる直径18m、深さ1.5mのすり鉢状の窪地があり、地表下1mに水を貯めるための粘土層が見つかり、池跡と確認されました。西側の基山山頂近くにも直径17m、深さ1mの窪地がみられます。

さらには韓国・百済の山城にも山頂に池が設けられていました。百済最後の都・扶余の北東約30㎞には、扶余以前の都・熊津があります（忠清南道公州市）。その中心は百済王が住まう公山城という山城で、この山頂の王宮には「蓮池」と呼ばれる貯水池が備えられていました。これは百済系の山城に備えられた山上の池の代表的な事例といえます。

これまであまり注目されていませんでしたが、類例をひもとくことで、これらの池も1350年前のもので、日本と百済をつなぐ遺構であることがうかがえそうです。

文化財課　井上信正

鏡池

けいさしの井

公山城王宮址の蓮池

編集／太宰府市総務部経営企画課：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121　FAX(921)1601　✉keiei-kikaku@city.dazaifu.lg.jp
この広報誌は再生紙を利用しています。